

甲斐の客中（萩生徂徠）

甲陽の美酒緑葡萄

霜露三更客袍を湿す

須らく識るべし良宵天下に少なるを

芙蓉峰上一輪高し

甲陽美酒緑葡萄 霜露三更濕客袍
須識良宵天下少 芙蓉峰上一輪高

解説 甲斐に遊び、その名産の葡萄酒を飲み富士を眺めて、その感懷を詠った詩。

語釈 ※甲陽＝甲斐に同じ。陽は南の意。※緑葡萄＝緑色したぶどう。※霜露＝霜と露。※三更＝現在の午後十一時から午前一時の間。※客袍＝旅装。※芙蓉＝富士山。※一輪高＝一輪の月が高く輝いている。

通釈 甲斐の国の特産であるおいしい酒は、緑うるわしいぶどうから造られたものである。このぶどう酒を飲み味わっているうちに、夜もふけて三更となり、霜や露がおりて旅のもしめってしまった。こんなよい夜というものは、世の中にめつたにあることではない。ふと空を見上げると、なんと富士の高嶺に一輪の月が高く輝いている。まことに愉快この上ない。